

患者会での交流 支えに



がんの相談情報サロンの「ピアネット」11名
古屋市中区大須4丁目

がんになった

記者の体験 下

8月、抗がん剤治療が始まった。体に潜むがん細胞をたたくため、錠剤「S1」を朝夕のむ。副作用は強烈だ。体が重く、朝起きた瞬間から吐き気がする。

上半分だけになった胃は、腸との境の弁がない。頻繁に下痢を起こし、嘔吐もする。手術で3割減った体重がさらに5割減った。効果が確実、という訳でもない。それでも転移を考えればやめられない。

最近、サロンや患者会に参加するようになった。先日の会合は赤ちゃん連れの夫婦から、80

不安やつらさ 吐き出し合う

代男性まで参加し、体の変調や不安を出し合った。抗がん剤のつらさを話したら、「2週間でやめたよ」「ほかの薬もあるぞ」と様々な反応。不思議に頑張ろうという気持ちになった。

「しっかり家族の看護ができただろうか」と振り返る女性に、70代の男性が「患者はみんなわがまま。でも心の中で感謝しているよ」と諭した。隣でその妻が涙ぐんでいた。

別の胃がん患者会も交流会や講演会がある。思い出したのが、10年前に死んだ父のことだ。がんで胃を全摘し、この患者会に入ってから食事を工夫していた。息子が愚痴することは少なかったが、きつと不安だっただろう。もっと耳を傾けるべきだった。

9月、職場に戻った。前のように取材はできないし、書けない。でもここから出発するしかないのだ。

ミーネット理事長

花井美紀さん (66)



亡き父への思いでサロン設立

最近、出入りするようになったのは名古屋市中区大須のがんサロン「ピアネット」。NPO法人ミーネットが運営する。がん経験者（ピア）が常駐し、患者会の運営や相談にのる。

理事長の花井美紀さん(66)は三十数年前、父をがんで亡くした。当時の風潮で告知はしなかった。症状が進んで苦しむ父に、ウソの上塗りを重ねて接するのが、つらかったという。没後、その父のベッドから、がんの解説書が出てきた。花井さんが持っていたのと同じ本で、同じように表紙は裏返しされてあった。父は知らないふりをして逝ったのか。泣けてしか

たなかったと振り返る。もっとほかに方法はなかったかと家族や患者が集まる場づくりを始め、10年前から市の委託事業にもなった。県の電話相談も請け負う。出張講座も含め昨年度は3800人が利用した。患者会やがんサロンは、地域の拠点病院でも設けている。院外の支援団体を含め少なくとも愛知に45、岐阜18、三重14の団体があり、各県がネットなどで紹介している。患者会も全がんで対象から、胃がん、乳がん、喉頭がんと部位別もある。

この連載は編集委員・伊藤智章が担当しました。今後とも随時掲載します